論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	エステル　ラスト

論文審査担当者	主　査	政策・メディア研究科委員　兼環境情報学部専任講師　藤田　護
	副　査	政策・メディア研究科委員　兼総合政策学部准教授　杉原　由美
		政策・メディア研究科委員　兼環境情報学部教授　加藤　文俊
		政策・メディア研究科委員　兼総合政策学部専任講師　馬場　わかな
学力確認担当者：		

エステル・ラスト君の学位審査論文は、「Japan's Living Swords: The Relational Dynamics of Human/Non-Human Encounters and their Impact on Contemporary Social Life」と題され、日本においてゲームを基点に舞台などへと多角的に展開していく「刀剣乱舞」フランチャイズが、2015 年以降に新たな女性の日本刀ファンを生み出し、そこで新たな日本刀との関わりが作り出されていく過程に着目する。人類学の観点から、日本刀が社会的アクターとして構築され、そして独自のエージェンシーをもっていく様相を、エスノグラフィックな（＝民族誌としての）記述を通じ、多角的かつ説得的に論じている。

本論文の構成は、導入である第 1 章、研究の方法論を述べた第 2 章に続き、第 3 章は、刀剣乱舞の女性ファンと日本刀の関係を基軸として、女性ファンの自己認識、日本刀の社会アクター化、そして博物館・美術館と女性ファンとの価値の共創を論じた 3 節構成をとる。第 4 章は、「刀剣乱舞」と日本刀をめぐる社会的取り組みとの交差する地点から、ローカル・アクターを通じた日本刀の社会アクター化、ローカル・アクターとファンらの相互作用を通じた場所形成、そして地域ごとの歴史ナラティブの共創を論じた 3 節構成をとる。最後に、全体の議論をまとめる第 5 章の結論がある。

以下、各章の要旨を述べる。導入である第 1 章では、関係論的存在論（relational ontology）の立場から、モノ（オブジェクト）が人間との関係の中で生きたアクターになっていく、という本論文の機軸を成す考え方が導入される。そして 2015 年の刀剣乱舞 ONLINE の導入が契機となり、女性の日本刀ファンが大幅に増加し、関連した日本刀の展示に合わせ日本中を旅行することで、各地域で日本刀をめぐる新たなアクター連関の下での価値形成が行われているという研究の背景が述べられる。

第 2 章では、本研究の方法論が述べられ、フィールドワークを通じたエスノグラフィー（民族誌）調査を通じてモノがアクターとして社会的に構築されていく様相を記述するという、方法の機軸が設定される。と同時に、コロナ禍での調査の困難という要因もあり、物理的に人が集まる日本刀展示や舞台などだけでなく、SNS 上の Twitter を中心とする人の集まりの中での、数年間にわたるエンゲージメントを併用し、また調査者自身が「お連れ様」または「もち」と呼ばれる小型の人形（モノ）を連れてこれらの場に参与するという、「共同参与（coparticipation）」が行われていることが述べられる。

第 3 章では、日本刀と女性ファンの関係を基軸として、まず第 1 節では、20 世紀後半からの歴史フィクションと女性の関わりの中で、2015 年の女性向けオンラインゲーム「刀剣乱舞」の導入が日本刀の分野で大きな画期となったことが位置づけられるとともに、ここでの女性ファンらが、「歴女」や「刀剣女子」など、外部から付与されるラベル（範疇）を拒否し、審神者（さにわ）というジェンダー化されないアイデンティティを自らのものとしていることが指摘される。第 2 節では、日本刀が生きたアクターであるということについて、これを擬人化（anthropomorphism）と捉えることは、人間の資質

論文審査の要旨及び担当者

を備えていないものにアクターとしての資格を認めないという意味で、新たな人間中心主義（anthropocentrism）を招来してしまうという陥穽が指摘され、これに対して、人間においてもモノとしての性質を認めつつ、人間とモノが相互浸透・相互構築する関係の中でモノが生きたアクターとして存在するようになる、とする関係論的存在論の考え方がもつ優位性が主張される。第 3 節では、博物館・美術館における日本刀展示が制度的場と客観的説明を提供するのに対し、審神者が自らの旅と情報収集を通じ、それぞれの日本刀の生の軌跡を感情的エンゲージメントともに受けとめ、それを自主研究や同人誌によって表現しする様が描き出され、地域によっては、博物館・美術館とファンとのあいだのコラボレーションによる価値の共創が実現しつつあることが記述される。

第 4 章では、刀剣乱舞と関連して日本各地で展開する、日本刀に関する社会的な取り組みがとりあげられる。第 1 節では、モノが博物館・美術館を越えて複数の場所に「住まう（inhabit）」という考え方が導入され、草の根の地域ビジネスや地域コミュニティによって、日本刀が単なるモノとしての「宝」から尊重される社会アクターとみなされ、遇されていく過程が、シビック・プライドの概念を援用しながら記述される。第 2 節では、女性ファンらが旅を通じてローカルアクターと相互作用し、またそれが日本刀自身の生の軌跡と切り結ぶ中で、価値と感情が付与された場所形成（place-making）がなされている様相が記述される。第 3 節では、日本刀の展示等に際して地域ごとに形成される歴史ナラティブに対し、日本刀の女性ファンがこの形成過程に参入することで、刀剣の社会アクター化を促しており、個々の日本刀に人格を与えていく相互過程が記述される。

結論となる第 5 章においては、モノも含めた各アクターが文化ネゴシエーターであるという観点のもとで、そのような交渉を通じてモノの場所への住まい（place inhabiting）が実現し、モノが生きた社会的存在として構築されていくのであるとして、前章までの記述と洞察がまとめられる。

本論文は以上の要約に収まりきらない、民族誌的豊かさ（ethnographic richness）と鋭い洞察を備えている。刀剣乱舞を博士論文の主題として扱うにあたり、表象と実際の社会的取り組みの両面を視野に入れた研究を目指すという方針は、早い段階で決まっていたが、本論文はこの目標を高い水準で達成するとともに、現代の人類学の理論的議論にも果敢に参入し、説得的な貢献をなしえている。

同時に、本論文では果たし得なかった課題を指摘することもできる。一つは、日本刀ブームを担う女性たちとナショナリズムの関係である。調査の過程で、「刀剣乱舞」の女性ファンらが、反中などの単純なナショナリズムが押しつけられることに対し異議を表明する場面がみられることが、例えば第 4 章第 3 節などに述べられているが、本論文はこれを体系的な議論として展開するには至っていない。また、沖縄の日本刀が「刀剣乱舞」に導入されたことは、「日本人の境界」について検討する重要な契機を与えていたが、コロナの拡大の波の合間を縫って行う調査では、そこまで射程を広げることが適わなかった。

しかしながら、本論文は人類学の最先端の理論動向と日本の文化研究を架橋することに成功しており、人類学の研究としてだけでなく、国際的な日本研究にも新しい視座をもたらすものである。よって、エステル・ラスト君の研究に博士論文として十分な達成を認め、ここに博士（学術）の学位授与を申請する。